２０２５年１月ハイパーカレンダーレポート

2025 年の幕開けは、トランプ大統領の就任とともに始まった。政治の舞台が一新されるなか、AI の世界にも新たな波が押し寄せている。今年初めのレポートでは、そんな激動の年を前に、まずは昨年の出来事を振り返ってみたい。

2024 年は、能登半島地震や羽田空港での事故など、自然災害と人為的事故が立て続けに起こり、社会のもろさが浮き彫りとなった。自動車の輸出台数も中国が日本を抜き、首位から陥落。ダイハツ工業の不正問題が追い打ちをかけ、日本企業の衰退が懸念される象徴的な年だったと言える。そうした困難のなかで、当研究所は情報モラル啓発セミナーを全国展開し、企業や個人の社会的責任を問い直す活動を粘り強く続けた。また、おおいた AI テクノロジーセンターでは、AI ビジネスコンテストを開催し、地方から AI 技術の発展を支える取り組みを進めている。別府湾会議では、日本語特化の大規模言語モデル「Tsuzumi」が紹介され、量子コンピュータでも日本の優位性が示されるなど、技術革新が社会にもたらす影響を大分から全国に発信している。

こうして 2024 年を振り返ると、技術と社会、そして個人が複雑に絡み合う年だったことが分かる。しかし、この文章をここまで読み進めた読者に伝えたいことがある。お気づきになったかたもいたかもしれないがこのレポートの大半は、実は生成 AI によってまとめられたものだ。特に振り返りについては昨年のカレンダーレポート 1 年分を AI にまとめさせた。このように AI の情報整理能力は目覚ましく、私たちが直面する課題を大きく改善できることを改めて感じている。

では、2025 年にはどのような未来が待ち受けているのだろうか。トランプ大統領が切り開く時代の行方は未知数だが、少なくとも、このレポートを通じて私たちは「人と AI の共創」が始まっていることを確認できた。人間がより創造的な仕事に注力できるようになり、プログラミングの知識がなくてもアイデア一つでアプリを開発できる時代は、まさに今目の前にある。そんな時代だからこそ、我々が運営しているおおいた AI テクノロジーセンターをはじめ、多くの組織や人々が力を合わせ、地方発のイノベーションを全国へ広げていく意義はますます大きくなるだろう。

「人と AI の共創」

さらに来月、おおいた AI テクノロジーセンターのプロジェクトが日本オープンイノベーション大賞にノミネートされることは、そうした可能性の一歩となる。私たち一人ひとりが、この新たな時代の到来を前向きに受け止め、社会や技術の変化とともに成長していくことこそが、2025 年の大きなテーマとなるのではないだろうか。

（文責：三重野　正己　挿し絵：有廣　美優）